

〔事例〕

自傷行動を併せ持つ精神運動発達遅滞児の要求行動に関する指導事例 ——指さしの形成に焦点を当てて——

鈴木 由美子¹⁾・小野 純平¹⁾・藤田 和弘²⁾

自傷行動を併せ持つ3歳7カ月の精神運動発達遅滞男児を対象として、指さしによる要求行動の形成に焦点を当て、指導を行った。指導は、(1)やりとり遊びを通して他者の存在を認識させ、意思伝達の相手を明確にすること、(2)要求の対象を明確にし、適切な要求行動を形成すること、の2点を目標とした。また、自傷行動は常に無視することとした。目標(1)に対しては、ロールの押し合い、ボール遊び、積み木を行った。目標(2)に対しては、①カセットデッキを本児の手の届かないところに置いておき、本児の好きな音楽をかける、②トレーナーが音楽を止める、③本児がカセットデッキを指さしたなら音楽をかける、のような統制場面を導入した。その結果、本児は他者とのやりとり遊びを行うようになり、要求行動として指さしを行うようになった。その後指さしは統制場面以外にも定着した。また、指さしの出現頻度が増えるに従い、自傷行動の回数が減少した。

キー・ワード：精神運動発達遅滞児 要求行動 指さし 自傷行動

I. はじめに

前言語期においては、動作による要求行動の成立がその後の言語習得に深く関与することが示唆されている。とりわけ指さしは出現時期が初語とほぼ同時であることから、重要な意味を持つものとされ(村田, 1968)、その意味や機能が研究されている(やまだ, 1987)。一方、障害児の要求行動の発達についても、健常乳幼児との違いやその問題点が明らかにされている(長崎・池田, 1982; 小山, 1991)。

本稿においては、他者とのコミュニケーション意欲が乏しく、また適切な要求手段を持たず、かつ自傷行動の見られる精神運動発達遅滞児の事例を取り上げ、本児に要求行動としての指さしを形成させ、定着させるに至るまでの指導経過と、それと並行した自傷行動の変化について報告し、指さしの出現を促す指導の効果とその導入時期、ならびに要求行動と自傷行動の関連性について検討を加える。

II. 事例(Y. Y. 児)

指導開始時年齢3歳7カ月、男児。新生児仮死後遺症による精神運動発達遅滞。

1. 生育歴

在胎週数29週間。出生時体重1446g(双胎)。仮死産

(Apgar指数3)。生後20日に水頭症と診断される。1カ月時に右シャント手術、14カ月時に左シャント手術。寝返り14カ月。

2. 家族構成

祖父、両親、姉、本児、妹の6人家族である。

3. 療育歴

9カ月時よりT市心身障害者センターに母子通園し、機能訓練を受ける。3歳7カ月時より本指導室(T大学指導室)にて指導を開始する。

4. 3歳7カ月時(本指導室への来所時)の発達状況

本児の発達状況を明らかにするため、津守・稲毛式乳幼児精神発達質問紙を実施した結果、生活年齢3歳9カ月時(45カ月)に発達年齢10カ月であり、発達指数(D.Q.)は21であった(Table 1)。最も顕著な遅れが見られるのが〈食事〉ならびに〈社会〉(7カ月)であり、ついで〈理解・言語〉(9カ月)であった。〈運動〉の面では、歩行器を押して介助なしで10分程歩くことができた。〈探索・操作〉の面では、1人で戸の開けしめができ、またカセットデッキの音量摘みを拇指と示指で摘み、手関節を旋回させ音量を変えることができた。

理解・言語の面の発達状況をより詳細に把握するため、三国丘・桃山式言語発達検査(長尾・志野・上好, 1990a, 1990b)の(1)発語前言語発達テストを3歳10カ月時に実施した。その結果、全体としては9カ月児相当の言語発達であるが、〈表出能力〉が3カ月、〈コミュ

1) 筑波大学大学院心身障害学研究所

2) 筑波大学心身障害学系

Table 1 津守式乳幼児発達検査の結果

検査時年齢	発達領域	運動	探索・動作	社会	食事・排泄 生活習慣	言語・理解
3歳9ヵ月	得点	43	30	16	10.5	2
	発達年齢	12ヵ月	9ヵ月	7ヵ月	7ヵ月	9ヵ月
4歳5ヵ月	得点	44	35	24	13.5	4.5
	発達年齢	12ヵ月	11ヵ月	12ヵ月	9ヵ月	10ヵ月

ニケーションの形成〉が7ヵ月と大きく遅れていた。

指導時の行動観察からは、以下のことが明らかにされた。

遊びは1人遊びの時間が長く、ボール投げなどのやりとり遊びは行わなかった。また、showing, givingなどの行動は見られなかった。

欲しい物があるときには手を伸ばして取ろうとするが、手が届かないときや自分でできないときなど、他者に要求を伝えるときには、側にいる人の腕を掴み対象の方へ引っ張るという、いわゆるクレーンを行った。しかし、相手を見ずに行う自閉症児のクレーンとは異なり、相手と視線を合わせて行っていた。

また、行きたいところに行かせないなどの欲求阻止場面において、手足をばたつかせながら大声を出して泣くなどのパニックが起り、同時に、床や壁に頭を打ち付けたり自分で頭を殴るなどの自傷行動が出現した。自傷行動の出現頻度は60分間の指導の中で4～5回であり、欲求を聞き入れたり抱き上げたりしない限り、いつまでも自傷を続けていた。

5. 指導目標の設定

以上のことから、本児の問題に関与する要因について、以下のような仮説が立てられた。

要求行動がクレーンにとどまり、指さしに発展していない理由として、本児の人との関わりの不十分さが挙げられた。指さしは指を媒介として何かを人に示す行為であり、当然伝達する相手を必要とするが、本児は相手の認識が不十分であるため、指さしが獲得されにくいものと考えられた。従って、人と関わる場面を多く設定し、他者の存在を認識させることにより、意思伝達相手を明確にする必要があると考えられた。

欲求阻止場面における自傷行動の原因も、要求表出の意思はあるものの、その対象を適切に表出する手段が獲得されていないためと考えられた。従って、適切な要求行動の形成を促せば、自傷行動も減少するのではないかと仮定された。

以上の仮定より、本児の要求行動に関する指導にお

いては、以下の指導目標を設定した。

- ① やりとり遊びを通して他者の存在を認識させ、意思伝達の相手を明確にする。
- ② 要求の対象を明確にし、適切な要求行動を形成する。

また自傷行動自体に対しては特に指導目標を設定せず、自傷を始めたなら頭を打ちつけても危険でない場所(マット上など)に本児を移すなどする他は、トレーナーは本児の自傷を無視し自傷を強化することのないようにし、観察を続けることとした。

III. 指導経過ならびに結果

当指導室(T大学指導室)においては、3歳7ヵ月から4歳5ヵ月までの10ヵ月に渡り、週1回、約50分の指導を行った。

以下、各指導目標ならびに自傷行動について、指導経過と子どもの変化を述べる。

1. 指導目標①『やりとり遊びを通して他者の存在を認識させ、意思伝達の相手を明確にする』についてここでは以下の活動を行った。

1) ロールの押し合い

直径56cmの樽型ロールを、本児とトレーナーが向かい合って力くらべをするように押し合う。

2) ボール遊び

ボールを渡す方向と対象(人)を本児に分かりやすくするために、穴の開いたついたてを本児とトレーナーの間に立て、穴を通してトレーナーからボールを受け取り渡す。

3) 積み木

トレーナーから渡された布製の積み木を、本児が積み上げ、崩す。

いずれの活動も本児の背後にサブトレーナーが控え、腕を介助するなどして活動への参加を促した。サブトレーナーの介助は本児の変化に従い徐々に減らした。

本児には母親との分離不安は見られなかったため、母親は当初は指導室外より指導を観察していた。しか

Table 2 やりとり遊びの指導経過

回数 (日付)	ロールの押し合い	ボールのやりとり	積み木 (布製のブロック)
1 ('91 4/19)			
2 (4/26)	○ロールの上に乗せ、前後に揺	○渡すを受け取るが、「ボール	○自分からTが積んだ積み木を
3 (5/24)	すると喜ぶが、Tがロールを 押しても押し返してこない	ちょうだい」の指示に反応を 示さない	崩す ○Tが「積み木ちょうだい」と 言っても渡そうとしない
4 (5/31)			
5 (6/14)			
6 (6/21)	○自分でロールを押すことを楽 しむようになる		
7 (8/30)	○Tに押されると押し返すが、 Tに注意を向けていない		
8 (9/6)	※母親が入室し、トレーナーとして一部指導に参加する		
9 (9/13)	●きちんと立ち上がりTに視線 を合わせての押し合いをする	※ついたてを導入する ○STに補助されやりとりをす るが、前にいるTを見ていな い	○積み木を渡されても自分から 受けとらずSTの補助にまか せきっている
10(9/20)	●Tを見てTとの押し合いを楽 しむ	○Tの「どうぞ」という呈示を 待たずに無理やり取ってしま う	●自分で積もうとする場面が見 られる
11(10/11)		○何度もボールを返すように指 示しても無関心で、Tが無理 に取り戻すとぐずる	●Tの補助を受けながら、自分 で積み上げようとする ●STの補助無しで積み木を受 け取る (1、2回)
12(10/18)			
13(11/1)			
14(11/15)			
15(12/6)		●「ボールちょうだい」の呈示 で返す	
16(12/13)			●渡された積み木を一人で積も うとする
17('92 1/10)			
18(1/17)	○喜んで押し合いをする		

注：T＝トレーナー ST＝サブトレーナー C＝本児

し、本児は家庭においてもやりとり遊びを行わないとの報告があったため、第8回の指導より母親も入室し一部指導に参加させ、家庭でも同様のやりとり遊びを行うよう指導した。

指導経過をTable 2に示した。それによると、指導開始当初は1人遊びの時間が長く、トレーナーの働きかけにも反応を示さないことが多かったが、指導の回を重ねるにつれ、相手に注意を向け、働きかけに応じる様子が見られるようになった。ロールの押し合いでは、第8回の指導まではトレーナーと向かい合っても注意を向けていなかったが、第9回の指導よりトレーナーに視線を向けるようになった。積み木では、それまで

サブトレーナーの介助に任せきりであったのが、第12回の指導より自分で積もうとするようになった。ボール遊びでは、第16回の指導より、トレーナーの「ボールちょうだい」という呈示に従い、ボールを手渡すようになった。家庭でも、10月中旬以降母親と向き合って遊ぶことが多かったとの報告がなされた。

Table 1に、指導開始時期の発達状況とともに、8ヵ月後の発達状況を津守・稲毛式乳幼児精神発達質問紙により示したが、特に社会の領域での変化が目立っている。これは、やりとり遊びの成立と伝達相手の明確化によるものと考えられる。また、三国丘・桃山式言語発達検査でも、〈コミュニケーションの形成〉におい

て、4ヵ月相当の伸びがみられた。

2. 指導目標②「要求の対象を明確にし、適切な要求行動を形成する」について

本項はトレーナーの対応ならびに本児の要求行動の変化、自傷行動の変化により、4期に分けて記述する。

1) 第1期：3歳7ヵ月～3歳10ヵ月

本期においては、本児の要求行動に対し指導上実現可能であるものには対応し、本児の要求の対象を観察することを活動の中心とした。その結果、音の出るもの（電話・カセットデッキ・オルガンなど）に高い興味を示すことが明らかとなった。

また、トレーナーは頻繁に指さしを提示し、また本児がクレーンを行ったなら手を介助して指さしの形にするなど、指さしを例示する活動を行った。この時期では本児の要求行動はクレーンや直接手を伸ばすのみであり、指さしは観察されなかった。

2) 第2期：3歳11ヵ月～4歳1ヵ月

この時期も指さしを例示する活動を継続して行ったが、本児の自主的な指さしは観察されなかった。

この時期、自傷行動の変化が観察された。第1期における自傷は欲求阻止場面で起こり、床などに頭を打ちつける激しいものであったが、第2期の自傷は周囲の関心が本児に向いていないと始まり、周囲の注意を喚起しているよう見受けられた。激しい自傷は減少したものの、人を意識し加減して行う自傷行動は、60分間で6～7回ほど見られた。

通園施設や家庭ではさらに、何か要求があると泣かずに頭を床に軽く打ちつけ、要求が周囲に聞き入れられるとそれをやめるといった、自傷行動を要求行動のサインとして用いていると考えられる場面が頻繁に観察された。その後本指導室でも、自傷行動はほぼ要求行動として行われるようになったので、通園施設や家庭においても、自傷行動に対しては無視し、強化しないこととした。

3) 第3期：4歳2ヵ月～4歳4ヵ月

第2期において自傷行動の要求行動化が観察され、本児はなんらかのサインを要求行動として用いることは可能であるが、現時点では適切なサインを身につけていないことが明らかとなった。従って、指さしの出現をさらに促し、自傷行動を適切なサインに置き換える必要があると考えられた。また、指導目標①において、他者に注意を向けるようになったことにより、伝達相手の明確化が可能であると考えられた。そこで、以下のような統制場面を導入し、指さしの出現を促す指導を開始した。

(1) カセットデッキを本児の手の届かないところに置いておき、本児の好きな音楽をかける。

(2) トレーナーが音楽を止める。

(3) 本児がカセットデッキを指としたら音楽をかける。

ここでカセットデッキを使用したのは第1期において本児の音楽に対する興味の高さが観察されたためである。

上記の指導を行った結果、Fig. 1に示すように課題試行数に占める指さしの割合が高くなった。それに伴い、クレーンは減少していった。また、要求行動化した自傷も、指導時間を通して2回（12月6日）から0回（1月17日）と減少した。

なお、本児の行う指さしは、示指が他の指から独立していないため、形態上は指さしと異なり、「手さし」と言うべきものであるが、本児は対象物に向かって身を乗り出さず、明らかに届かない距離であっても手を伸ばしているため、機能的には指さしと同じ役割を果たしていると考えられる。従って、以降も本児の行う「手さし」は「指さし」の語を用いて記述する。

4) 第4期：4歳4ヵ月～4歳5ヵ月

この時期も第3期と同様の指導を継続し、指さしの定着をはかったところ、統制場面での指さしの割合は80%を維持し、クレーンは見られなくなった。

これまで通園施設や家庭では、本児は要求を伝える際、クレーンまたは要求行動化した自傷行動を行うのみであったが、この時期、玩具や食べ物、窓などに対する指さしが観察された。本指導室でも、統制場面以外での指さしが観察された。これに対し、可能であればすぐさま要求を実現し、指さしの出現を促すよう指導を行い、家庭や施設でも同様にしたところ、指導全体や家庭、施設においても指さしが増え、クレーンや要求行動化した自傷は見られなくなった。

さらに、要求行動化した以外の、激しい自傷行動の発生頻度も減少した。指導開始当初（3歳7ヵ月）は1回の指導中に4～5度自傷を行ったが、4歳4ヵ月時には指導中1度も自傷せずに指導を受けることができるようになった。

IV. 考 察

以下では、指さしの出現を促す指導における統制場面導入の効果と導入時期を中心に考察する。

指導目標②の第3期において統制場面を導入したところ、まもなくクレーンと指さしの割合が逆転し、指さしが定着した（Fig. 1）。指さしの定着にあまり時間

を要しなかった理由として、以下の3点が考えられる。

第1に、指導目標①のやりとり遊びを通して、伝達相手の明確化が十分になされていたためと考えられる。統制場面を導入したのは4歳2ヵ月時であるが、この頃には既にロールの押し合い、積み木ではやりとり遊びが成立していた。またまもなくボールのやりとりもできるようになった。さらに、トレーナーへのだっこせがみを頻繁に行うようになっていた。これらが、指さしの出現に必要な「伝達相手の認識」を促したのであろう。

第2に、指さしと要求実現との因果関係が、統制場面を導入することで本児に理解し易くなったためと考えられる。統制場面導入以前の、トレーナーが指さしを例示する指導では、指さしという行為とその結果要求が実現するという因果関係は余り明確に示されておらず、理解し難かったのであろう。本児は、自傷行動を要求行動として用いたことから分かるように、何かサインを発すれば他者が注意を向け、要求が満たされることをその時点では既に理解していたと考えられる。因果関係がより限られた場面で明確に示されたため、場面理解も速やかだったのではないかと考えられる。

第3に、対象として選んだカセットデッキが本児にとって興味の高いものだったためと考えられる。指導目標②の第1期での観察から音に対する興味の高さは示されており、また家庭でも好きな音楽が聞こえていれば落ち着いて遊んでいられたとの報告があった。要求の対象としては適切な選択であったであろう。

指さしの出現を誘発し定着を促す上で、統制場面の導入は効果的であった。しかし、上記の理由から察するに、本児は統制場面を導入した時期には既に、指さ

し出現の準備が整っていたと考えられる。従って、やりとり遊びが成立した後でなければ統制場面の効果は見られなかったのか、あるいはもっと早期に導入しても効果は期待できたのか、統制場面の導入時期については検討が必要であろう。ロールの押し合いで相手に視線を合わせるようになったのは3歳11ヵ月時であったが、それと同時期に、要求行動化した自傷行動が家庭などで観察されている。指さしの例示はこれより以前（要求行動についての指導第1期）より行われており、因果関係の理解という点からも、第2期より統制場面を導入しても効果があったのではないかと考えられる。要求行動としての指さしが出現するためには、どの程度の発達レベルを必要とするのか、健常児における研究などを通して明らかにし、障害児を指導する際の指標を作成する必要がある。

要求行動として指さしが定着するのに伴い、自傷行動全体が減少した。本指導室においてのみならず、通園施設や家庭からも自傷行動の減少が報告された。適切な要求行動の形成が自傷行動の減少につながったと考えられる。

本児は現在（4歳9ヵ月）も指導を継続中であるが、今後は、さらに複雑・多様化するであろう本児の要求に対し、どのような表出手段の形成が可能であるか検討し、指さしよりさらに高度な要求行動を育てて行く必要があると考えられる。

文 献

- 1) 小山 正(1991): 精神発達遅滞児における意図的伝達行為の発達とその認知的前提に関する研究。音声言語医学, 32(2), 185-197.
- 2) 村田孝次(1968): 幼児の言語発達。培風館。
- 3) 長尾圭造・志野和子・上好あつ子(1990a): 発語前言語発達検査法—その1。テスト内容の概要—。脳と発達, 22(4), 319-326.
- 4) 長尾圭造・志野和子・上好あつ子(1990b): 発語前言語発達検査法—その2。テスト結果の概要—。脳と発達, 22(4), 327-335.
- 5) 長崎 勤・池田由紀江(1982): 発達遅滞乳幼児における前言語的活動(1)—ダウン症乳幼児と正常乳児の要求場面での伝達行動の分析—。日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 898-899.
- 6) やまだようこ(1987): ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち1—。新曜社。

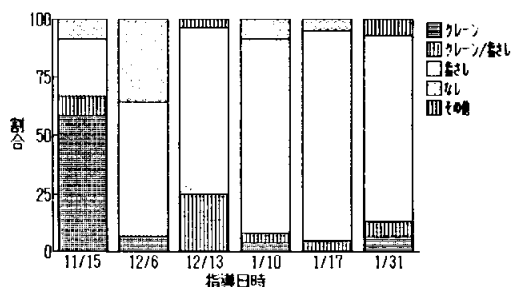


Fig. 1 課題試行数に占める各要求行動の割合

注: クレーン/指しはクレーンをした後指しをしたもの

Case Study

A Case Study on Demanding Behavior of Psychomotor Retarded Child with Self-Injury Behavior: Focusing on Formation of Pointing

Yumiko SUZUKI, Junpei ONO, and Kazuhiro FUJITA

Trainings, which focused on formation of demanding behavior by pointing, were conducted to three-years seven-months old psychomotor retarded boy for about a year. He was behind in the areas of understanding language, speech, and personal relationship. He had hardly played with another person. He had no effective demanding behavior, so when he had something to do or to want, he left and pulled someone's arm. When a demand was not granted, he injured intensely himself by beating his own head. Later he used his own discretion to beat a head, and he used self-injury behavior with a view to catching someone's attention.

Trainings had two targets;

- (1) to recognize another person clearly through the play with give and take;
- (2) to form a demanding behavior properly by using an object of he wants.

Whenever self-injury behavior occurred, it was ignored.

As regards target (1), activities as follows were practiced; pushing a cushion like a barrel, interchanging a ball, and heading blocks. And as regards target (2), the following procedure were gone through orderly under the controlled setting;

- (1) A tape recorder was placed where he could not reach it, and his favorite music was played with it.
- (2) The music was stopped playing.
- (3) If he pointed tape recorder, the music was played for at once.

As the result of these trainings, he had come to play with another person, and pointing appeared in the controlled setting as a demanding behavior. After that pointing appeared in the other demanding situations. As use of pointing increased, frequency of self-injury behavior decreased.

Key Words : psychomotor retarded child, demanding behavior, pointing, self-injury behavior